

論文

## 長野県<sup>あおきした</sup>青木下遺跡出土鉄鏃の再検討

平林 大樹

青木下遺跡は長野県坂城町に所在する集落遺跡である。発掘調査で多量の須恵器と土師器を環状に配した祭祀遺構が検出され、東日本屈指の土器集積遺構として、祭祀行為の実相をめぐる議論が交わされてきた。いっぽうで鉄製品については研究の俎上に上がることがないまま、今日にいたっている。

筆者は、地域における生産から副葬にいたる具体相をあきらかにするためには、古墳以外の遺構から出土した資料と古墳出土資料とを比較する作業が必要であると考えており、豊富な鉄鏃が出土した本例は、鉄製武器のライフヒストリーを究明する重要資料であると理解している。

以上の認識にもとづき、X線透過写真を援用した図化作業を実施し、鉄鏃53点を再図化した。これらは、かつて筆者が提示した長

野県域における古墳出土鉄鏃の変遷案のⅠ期からⅡ期に位置づけられる。全体組成は、圧倒的に平根式の比率が高く、古墳出土鉄鏃との大きな差異を指摘できる。また、形態規範を外れた個体やエラボレーションが欠落した粗雑な印象を受ける個体が一定数含まれており、大多数は遺跡の周辺地域において製作され、供献された地域生産品と考えた。いっぽう、ナデ関三角式については、長野県域の出土例が僅少であるため、他地域からの搬入品と解釈し、形態の多様性から、静岡県域や関東地域といった近接地域を搬入元の射程に入れる必要性を指摘した。

以上の作業により、古墳副葬鏃の分析だけでは把握しがたい地域社会における武器の生産・授受・供献にかかる具体相の一端を示すことができたと考える。

### はじめに

青木下遺跡は、長野県坂城町南条地区に位置する集落遺跡である。1996年、大型店舗建設に先立つ発掘調査がおこなわれ、多量の須恵器と土師器を環状に配した祭祀遺構が検出された。遺跡からは土師器や須恵器のほか、鉄鏃をはじめとする鉄製品も数多く出土しているが、十分な検討が実施されないまま、今日にいたっている。

筆者は、鉄製武器が授受される背景にある古墳被葬者ないしは葬送儀礼執行者と地域社会との関係について関心を抱いており、長野県域をケーススタディとして、矢鏃の生産と流通の具体相に接近するための作業を継続してきた。しかしながら、品目の選択や伝世といった副葬武器の特性を鑑みるならば、古墳以外の遺構から出土した資料と古墳出土資料とを比較し、共通点と相違点を確認していくことが地域の実相をあきらかにするために不可欠な作業であるとの考えを巡らせている。この点において、量的に充実した本遺跡出土の鉄鏃は、地域社会における鉄製武器の生産・流通（授受）・保有・副葬・供献といったライフヒストリーを究明する重要資料であると認識している。

本稿は、青木下遺跡から出土した鉄鏃についてあらたな実測図を提示し、型式学的検討を通じて、長野県域における鉄鏃の来歴をさぐる作業である。

## I. 問題の所在

### 1. 遺跡の概要

青木下遺跡は長野県坂城町南条地区に位置する。背後に虚空蔵山が迫る自然堤防および後背湿地に立地し、遺跡の西方 500 m には千曲川が北流する（第 1 図）。1996 年、大型店舗建設に先立つ発掘調査が実施され、調査面積 5,000 m<sup>2</sup> のうち 3,000 m<sup>2</sup> において、古墳時代後期の竪穴建物跡 12 棟などとともに 21 基に区分された土器集積遺構（Ut）<sup>(1)</sup> が検出された。土器が環状に並んだ状態で出土し（第 2 図）、その点数は約 5,000 個体を超える。出土遺物は、土師器、須恵器、手づくね土器、石製模造品、鉄製武器や武具、農耕具からなり、組成や出土量、出土配置などを総合し、報告書では祭祀遺構として結論づけている（助川編 2007）。

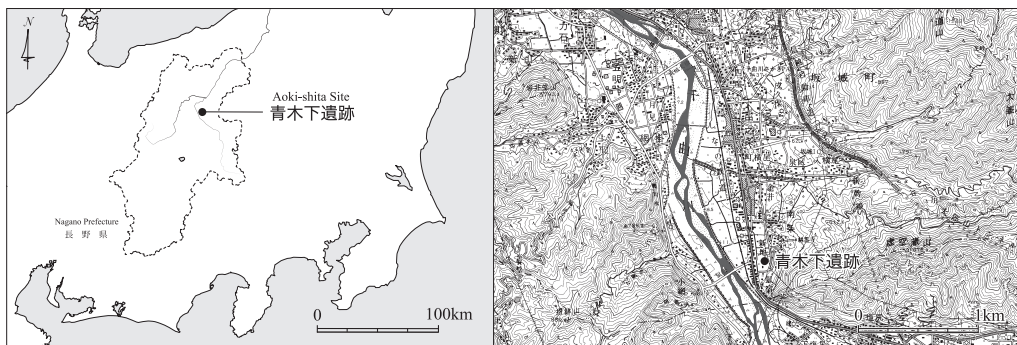
本遺跡は、須恵器の年代にもとづき、古墳時代後期前半頃から飛鳥時代前半頃までの 100 年以上もの間、祭祀場として継続的に使用されていたと解釈されている。集落の祭祀場としては特異な規模であり、祭祀行為者の参集範囲を解明できれば、当地における領域概念を考える重要な手がかりとなりうる。

### 2. 出土遺物をめぐる議論

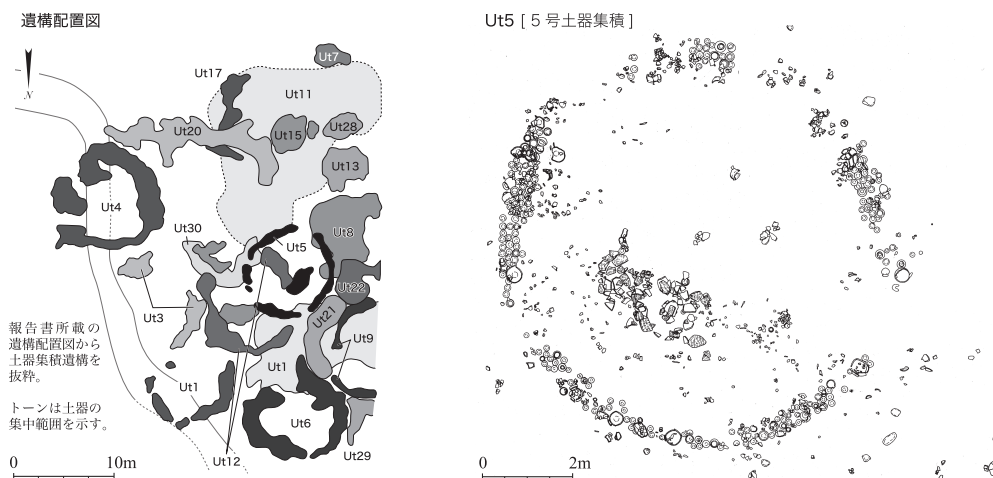
本遺跡は、発見当時から東日本屈指の土器集積遺構として、祭祀考古学を専門とする研究者が中心となり、土器の配置や種別から、祭祀行為の実相をめぐる議論が交わされてきた（助川 1997、篠原 2006、櫻井 2007、梶山 2008、笹生 2010、桐原 2012、櫻井 2015 など）。

いっぽう、鉄鏃をはじめとする鉄製品については、研究の俎上に載ることがないまま今日にいたっている。報告書の刊行時点では、資料の激しい錆化から正確な外形状を把握できず、型式学的検討が困難であったことにくわえ、遺構の形成が長期間にわたっており、伴出遺物から時期を特定しがたいといった遺構特有の資料的制約が主要因と推察する。

しかしながら今日では、坂城町教育委員会が継続的に実施した保存処理によって、X 線写真を援用した外形状の把握が可能な段階にある<sup>(2)</sup>。筆者は、長野県域の古墳副葬矢鏃に着目し、



第 1 図 遺跡の位置



第2図 土器集積遺構

生産と流通の具体相に接近するための作業をすすめてきた（平林 2013・2014・2017・2018・2021）。しかしながら銅鏡や刀剣と異なり，狩猟などの日常使用も想定される器物としての特徴を踏まえるならば，古墳以外の遺構から出土した資料と古墳出土資料とを比較し，その違いを探る作業が必要であるとの認識をもちはじめている。集落出土鉄鏃の分析については，池上悟の先駆的分析（池上 1982）があり，古代の鉄鏃編年大綱を構築した津野仁の一連の仕事（津野 1990・2007）や，狩猟としての機能に着目し，平根式の分析をすすめた種石悠の研究（種石 2009）を挙げることができる。近年では，箕浦絢が関東地域の竪穴建物跡から出土した鉄鏃について悉皆的な集成作業を実施し，分布と組成をあきらかにしている（箕浦 2019）。塚本敏夫も，古墳時代から中世にわたる武器・武具埋納祭祀を検討する中で，竪穴建物跡出土鉄鏃に言及する（塚本 2022）。古墳副葬品が中心であった矢鏃研究であるが，以上のように，集落等の出土例にかかる分析視角は広がりつつある。

また，遺構についても，近年，埼玉県北大竹遺跡において，古墳時代後期の土器集積遺構が検出され，土器のほか，多量の子持勾玉や鉄鏃，農耕具，単鳳環頭大刀の柄頭が出土している（渡邊・赤熊編 2022）。群馬県金井下新田遺跡（小島ほか編 2021）などの成果にも目を向ければ，孤立無縁に思われた青木下遺跡の土器集積遺構についても，重要な比較例が増加していることがわかる。

こうした諸情勢をふまえるならば，本遺跡出土の鉄鏃群（以下，本例）は，地域に所在する鉄鏃の来歴説明に寄与する資料であると認識する。

### 3. 分析の方法

**分析上の課題と視角** 本例については，古墳の副葬品と異なり，器物の最終履歴としての一括性が確保できないという課題が横たわる。確かに鉄製品でも型式変化が鋭敏でない器物は須

恵器の年代に従属せざるをえないものの、鉄鏃については須恵器によらない広域編年と地域編年が構築されており、資料的制約を克服できる研究段階にある。現況の研究水準に基づく実測図を作成し、遺物自体の型式学的検討に立脚した年代的な峻別をおこない、年代的な隔たりの大きい遺物を除外できるならば、本遺物に学術的な価値を与えることができ、ひいては生産や流通にかかる議論の起点となる資料に変化をとげる可能性を含んでいる。

**分析の手順と前提** 以上の認識に基づき、本稿では以下の手順で分析をおこなう。まず、出土鉄鏃について、X線透過写真を援用した図化作業を実施する。つぎに、型式学的検討をすすめ、細部の特徴から年代を与えたのち、出土土器との通時的関係を確認する。そのうえで、古墳出土例との比較から鉄鏃の特徴を整理するとともに、特殊形態をもつ鉄鏃に着目し、生産や搬入、供献といった来歴について復元を試みる。

本分析の前提となる鉄鏃の分類基準および名称については拙稿の分類案（平林 2013 : 126 頁）にもとづくが、本文中では原則として細別形式名のみを簡略化して呼称する。

時期区分については、古墳時代後期後半～末（陶邑編年 TK43～209 型式）、飛鳥時代前半（飛鳥編年Ⅱ・Ⅲ期）、飛鳥時代後半以降（飛鳥編年Ⅳ期～平城編年Ⅰ期以降併行期）に大別する。

なお、筆者は、副葬器物の名称としては、完成品である「矢」という表現が妥当であるという立場に立つが、鉄鏃を主たる検討対象とする本稿では、主に「鉄鏃」を採用し、包括する表現が必要な文脈においては「矢鏃」も併用する。

また、本遺跡における祭祀行為の実施を首肯する立場から、遺構から鉄鏃が出土する背景に、矢を捧げ物として置き供える行為を想定し、これを「供献」と呼称する。

## Ⅱ. 出土鉄鏃

### 1. 概 要

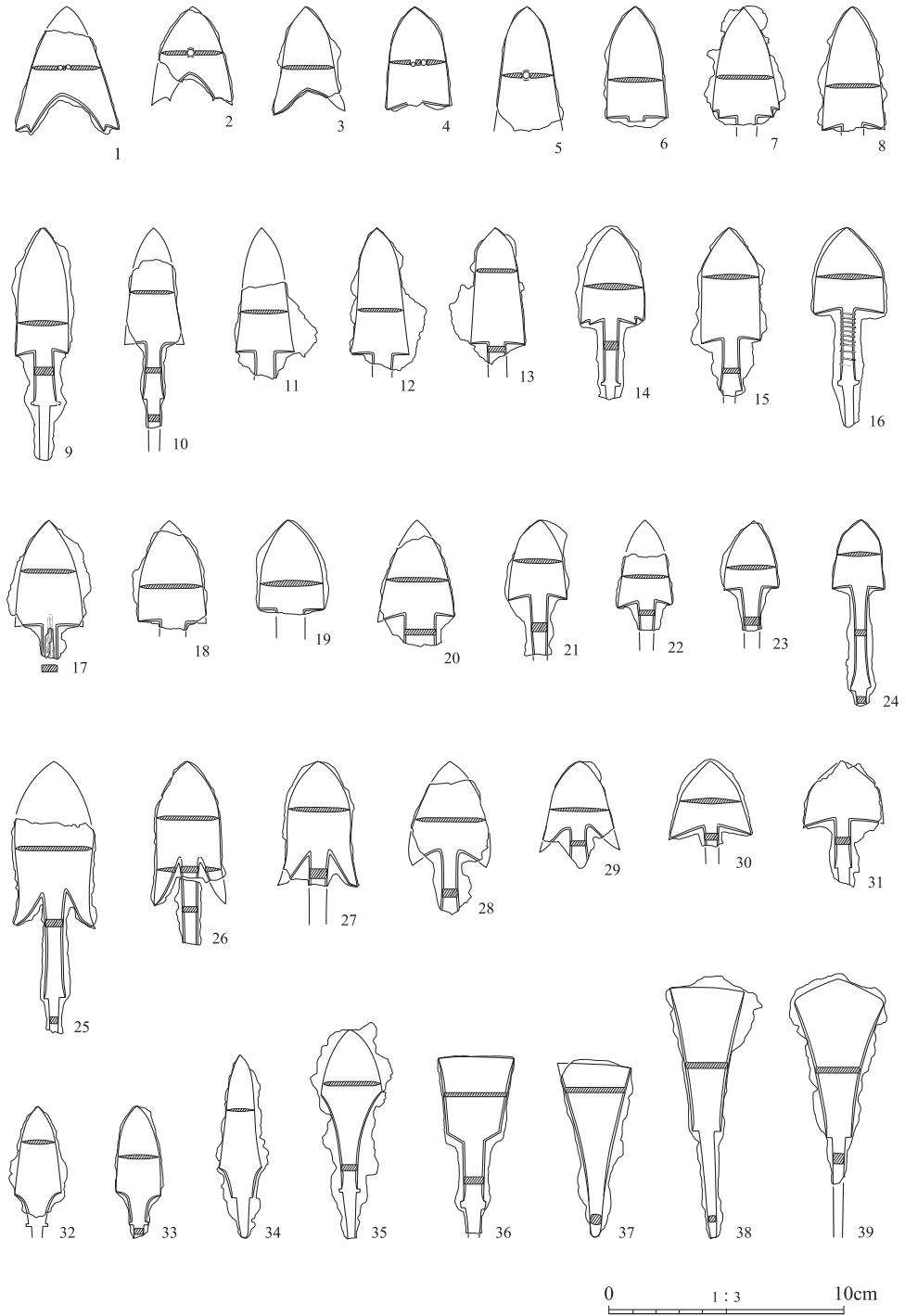
本遺跡出土の鉄鏃は、細片すべてを含めるならば、総点数は 100 点を超える。今回の作業では、このうち型式同定が困難な細根式の頸部片や鏃身部の小片を除いた 53 点を図化した。本稿では、鏃身部片 1 点を除く 52 点を掲載している。以下、細別形式ごとに特徴を記述する。

### 2. 平根無頸式（第 3 図 1～5）<sup>(3)</sup>

頸部をもたず、鏃身中央付近に孔を有するものを無頸式に区分した。1 から 3 は無茎式で、中央に根挟みの緊縛を目的とした単孔ないしは双孔が穿孔される。深い腸挟（1・2）と浅い腸挟（3）をもつものの二者があり、前者には重挟が施される。4 は短茎式とみられるが、茎部を欠いている。6 もその可能性があるが、孔をもたないため、後述の平根有頸式に区分した。

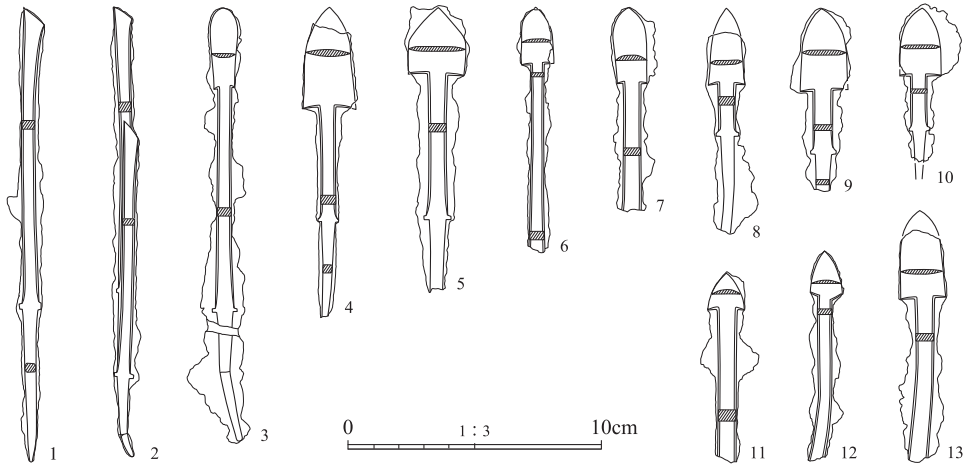
### 3. 平根有頸式（第 3 図 6～39）

**概 要** 鏃身形状は多様で、長三角式（6・7・13・14・17～19）、五角式（15・16・31）、腸挟長三角式（8・9・20～24・28）、柳葉式（10～12）、腸挟柳葉式（25～27）、腸挟三角式（28）、腸挟五角式（29・30）、ナデ関三角式（32～35）、方頭式（36～38）、圭頭式（39）の



第3図 平根式の諸例

2・16・19・36・38:Ut1 23:Ut2 20:Ut3 7・11~13・15・22・25:Ut4 17・24・28:Ut5  
 1・6・10・32・33:Ut6 8・30・37:Ut11 5・31・34・39:Ut12 9・18・27:Ut20 14:Ut21  
 21・26・35:Ut22 3:Rえ10 4:Rえ3グリッド 29:Rか4グリッド



第4図 細根式の諸例

7 : Ut1 2 : Ut3 3・10・13 : Ut4 1・5・6・10・12 : Ut5 9・11 : Ut6 4・7・8 : Ut11

10種に細別しうる。ただし、茎部を含めて完存している個体は少なく、細別形式の確定が困難な個体も多い<sup>(4)</sup>。7と14は鍔身角部に重抉をもち、重抉Ⅲa類(平林2014:19頁)に該当する。どちらも肉眼観察では認識できず、X線透写写真の判読作業から存在を確認したものである。19・20は、頸部幅が1cm以上と広く、類例をみない形態である。21から24は腸抉長三角式に区分したが、鍔身が小さく細根式との弁別が難しい。このうち、21から23については、24と鍔身寸法が近似することから、同程度の長さをもった頸部を想定しうる。腸抉柳葉式(25)は出土資料中、もっとも寸法が大きな個体で、外反する深い腸抉をもつ。

**ナデ関三角式(32~35)** 鍔身下半が内湾しつつ茎関にいたるものを指す。本形式は、旧稿において、明確な古墳出土例を確認し得なかったため、設定を見送っていた(拙稿2013)。ここではさしあたり、研究者の相互認識が可能な名称であるナデ関三角式を採用する。出土例はヴァリエティに富んでおり、鍔身が小さく下半が強く屈曲するもの(32・33)、外縁がS字を描く細長い鍔身をもち、ゆるやかに茎関にいたるもの(34)、鍔身幅がやや広く、関部がゆるやかにカーブしつつ茎関にいたるもの(35)に細別しうる。

**方頭式(36~38)・圭頭式(39)** どちらも型式設定を見送っていた形式である。方頭式もヴァリエティに富む。36は頸部をもち、斜行する鍔身関と幅の広い棘状突起が特徴的である。このほか、茎関の作出が省略されたもの(37)や直角関をなすもの(38)がある。

#### 4. 細根式(第4図)

**片刃式(1・2)** どちらも、鍔身関をもたず、刃部の縮小化が進行した片刃d式である。2は鍔長10cmと11cmを測る2点が鏽着している。

**両刃式(3~13)** 鍔身形状は、両刃a式(3・4・6~10・13)、五角式(5)、両刃b式(11・

12) の3種である。両刃 a 式は、一般に柳葉式と呼ばれるもので、3、6、7、13 のような通有形態のほか、8～10 のように頸部長が 2 cm ～ 2.5 cm と短い個体がある。4 については、頸部長から細根式に区分したが、鏝身寸法は平根式に近く、平根式と細根式の特徴を両有する一群と理解することもできる。両刃 b 式のうち、12 は鏝身関が斜行し、左右で関の位置がずれる。

### 5. 根挟み模倣鉄鏝 (第3図 16・17 / 写真1)

第3図 16 では、鏝部の表面に繊維とおぼしき痕跡を観察しうる (写真 1-1)。塚本敏夫は、「鎮め物」として青木下遺跡の鉄鏝に触れ、紐状の有機質に巻かれていると指摘する (塚本 2022 : 38 頁)。ただ、本例が塚本が指摘する個体に該当するかは定かではなく、有機質と判断できなかったことから、実測図への表現を見送った。いっぽう、同例については X 線透過写真の観察を実施したところ、頸部に 2～3 mm 間隔で紐状素材を巻き付けている様子も読み取れた。頸部の半分ないしはほぼ全面を被覆する行為は、根挟み模倣鉄鏝の巻付け型に該当するもので、頸部に糸や繊維を巻いて根挟みに見立てたものと考え (平林 2021 : 134 頁)。

第3図 17 では根挟みと思しき尖頭形の有機質部材が付着する (写真 1-2)。しかしながら茎部厚が 3 mm と厚手であり、鏝身関からの残存長も 1.4 cm と長いなど、根挟みを固定する機能を逸脱している。以上から本例は短茎式ではなく、頸部を欠損した平根有頸式と判断できる。したがって、有機質部材も根挟みではなく、頸部に木質を取り付けて根挟みに見立てた根挟み模倣鉄鏝の挟み込み型 (平林 2021 : 133 頁) と判断しうるものである。

### 6. 編年的位置

**鉄鏝の編年的位置** 本例については、さきに述べたように、完形の個体は多くないが、編年上の指標となる属性を確認できる個体について、かつて筆者が提示した変遷観 (平林 2013) に基づき、編年的位置を確認する。

まず、上限については、平根式において茎関まで残る個体のうち、第3図 14・16・33・35・



写真 1

1 : 外表面の繊維状痕跡 (Ut5)    2 : 尖頭形の有機質部材 (Ut1)

36が、細根式では、莖関が残る個体がすべて棘関である。棘関が古墳時代後期後半に登場することについては、先行研究によって定見をえており<sup>(5)</sup>、拙稿のⅠ期、すなわち古墳時代後期後半を上限に定めることができる。第4図8～10のように、短い頸部をもつ両刃a式については、古墳時代中期のいわゆる短頸鏃との類似から、後期前半まで遡上する要素をもつが、棘関の存在から後期後半以降の所産となる。また、平根五角式と腸扶五角式（第3図15・16・29・30・31）についても、鏃身形態から拙稿のⅠ期に位置づけられる。そのほかの平根有頸式や平根無頸式（第3図1～5）については、型式変化にとほしく、時期の特定が難しい。腸扶柳葉式（25）は寸法が大きく、やや古相の可能性を残すものの、そのほかの個体については長野地域の古墳出土例と比較する限り、古墳時代後期前半まで積極的に遡らせる要素は見当たらない。

一方、下限については、片刃d式（第4図1・2）が拙稿のⅡ期以降に位置づけられるほか、方頭式についても飛鳥時代後半から奈良時代の事例に類似しており、時期が下る可能性がある。とくに第3図36と38が出土したUt1については、報告書では奈良時代以降の洪水砂層混入遺物との所見が記されており、とくに取り扱いには留意が必要である。

以上の検討から、拙稿Ⅰ期～Ⅱ期（古墳時代後期後半～飛鳥時代前半）を中心とする時期に位置づけられる。

**出土土器との関係** つぎに、搬出土器から年代を点検する。第5図は鉄鏃が出土した土器集積遺構から出土した土器のうち、型式変化が明瞭で年代の指標となりうる須恵器蓋杯や高杯、甕を抜粋し、提示したものである。型式変化や生産地の詳細には立ち入らないが、いずれの遺構においても陶邑須恵器編年TK43～TK217（飛鳥Ⅱ期）型式期の杯H（合子状蓋杯）が主体である。MT15型式期の杯身のほか、宝珠つまみをもつ杯Gや、高台をもつ杯Bも出土するが、その点数はわずかである。

ところで、櫻井秀雄は、新たな「祭場設営」のために切り合う箇所や近接箇所には、「土をかけて見えなく」する、「以前の祭祀に用いられた土器類を片づける」といった作業が行われたとの理解を示し、「土器集積址で埋め尽くされたような」祭祀景観を想像する（櫻井2015：15頁）。櫻井が指摘するように、土器の出土状況を累積的に須恵器が集積した結果と理解してよいならば、各遺構における供献行為の中心時期は、もっとも出土量が多い須恵器型式が示す時期と理解するのが穏当である。確たる根拠をもつわけではないが、鉄鏃を装着した矢の供献行為もそうした盛行期間の中で実施された蓋然性を高く見積もることができると考えられる。

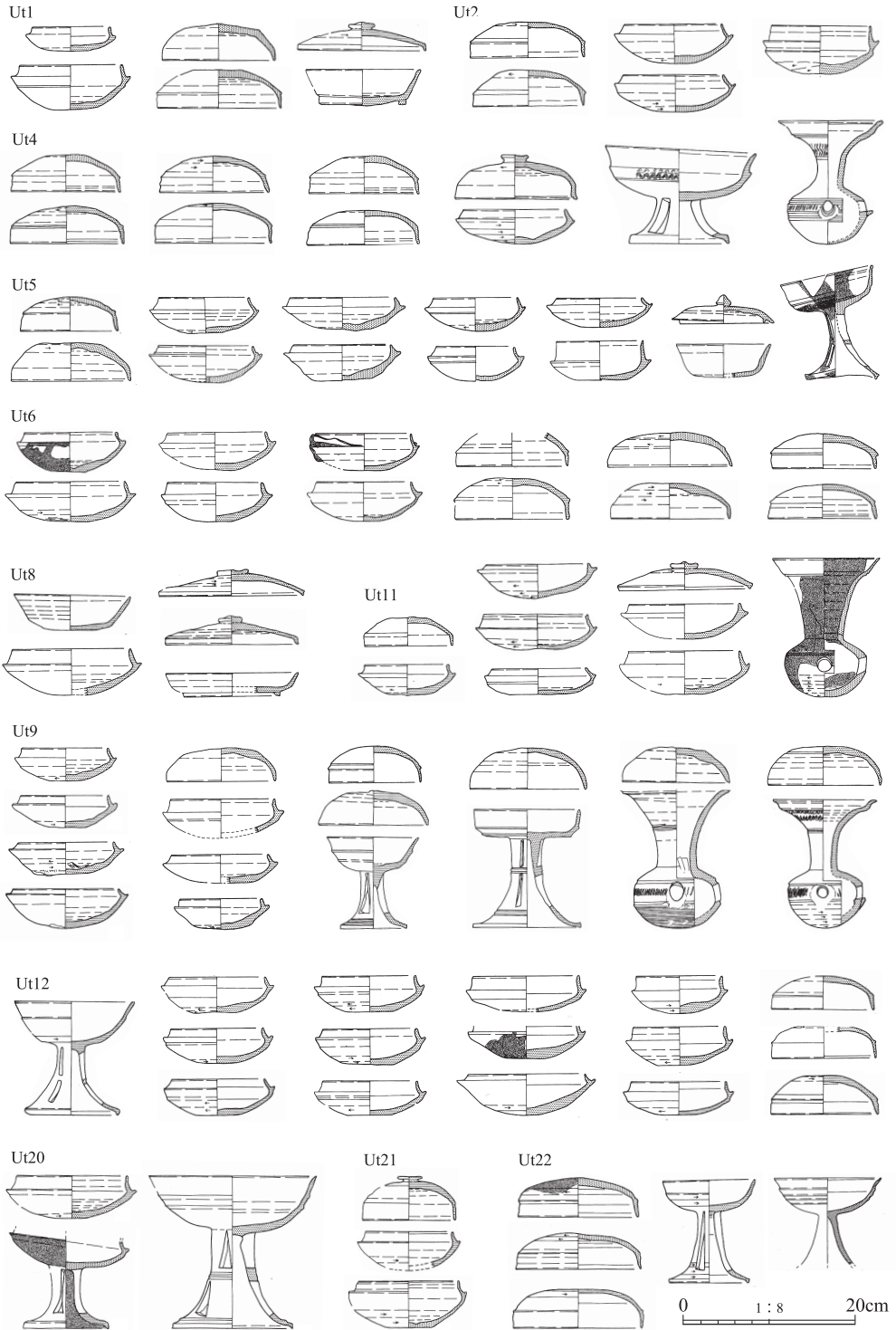
厳密な対応関係を定めることは困難であるが、点検作業の結果を是とするならば、鉄鏃で示した年代観との間に大きな齟齬は生じていないものとみてよいだろう。

### Ⅲ. 矢鏃の地域生産・搬入・供献

#### 1. 鉄鏃の特徴

前章までの基礎作業をつうじて、出土鉄鏃が古墳時代後期後半から飛鳥時代前半を中心とした時期の所産であることを示した。本章では、組成と細部形状について古墳副葬鉄鏃との比較





第5図 鉄鏝が出土した土器集積遺構出土の須恵器

を実施し、来歴の検討をすすめる。

**組 成** 今回提示した資料は、平根系が 39 点、細根系は 13 点を数え、圧倒的に平根式の比率が高い。手続きに厳密さを欠いているという批判は免れないが<sup>(6)</sup>、かつて筆者が長野地域の古墳副葬鉄鏃を集成した際に、細根式の点数が圧倒的多数であった事実を顧みれば<sup>(7)</sup>、細根式多数と平根式少数から構成される古墳副葬のあり方との大きな差異を見出せる。箕浦純は、関東地域の竪穴建物跡出土例を分析し、「平根系鏃」の「比重が大きい」事実をあきらかにしたが（箕浦 2019：34 頁）、こうした成果とも符合する結果を示している。

**細部形状** つぎに、各細別形式における細部形状を長野地域の古墳副葬鉄鏃と比較すると、大多数において共通性が認められた。とりわけ第 3 図 7 と 14 は、長野地域の佐久地域や長野地域に特徴的な重拵をもつ平根有頸式であり、かつて筆者が小地域生産を示す資料として提示したものである（拙稿 2018：108 頁）。古墳副葬品と集落出土品の接点となる資料として重要である。

いっぽう、頸部幅が広い腸挟三角式（19）や両刃 a 式のうち頸部長が短い一群（第 4 図 8～10）のように、古墳副葬鉄鏃に類例をみない個体も確認しうる。どちらも頸部を含め、厚さ 2.5 mm から 3 mm を測る薄手のつくりであり、他の平根有頸式にも認められる特徴である。さらに第 3 図 3 や第 4 図 12 のように腸挟や鏃身関が非対称な個体も確認できる。古墳副葬鉄鏃と異なる細部形状やエラボレーションが欠落した粗雑な印象をもつ個体が一定数含まれる。

**鉄鏃の製作地と供献** こうした諸特徴から、本例には供献行為のために製作された特注品と認定すべき個体が少なからず含まれているとみられる。行為執行者と製作者（集団）との近い関係性が想起され、近在の製作者（集団）に製作を指示したものと考えられることから、鉄鏃群の大半は地域生産品であり、遺跡の周辺地域において製作され、土器とともに供献されたとする見方を妥当性の高い解釈して提示する。

ところで、Ut6 からは残存長 10 cm を測る鉄矛の模造品も出土しており（第 6 図）、鉄鎌や鉄鋤先についても祭祀模造品とみなす意見（笹生 2010：103 頁）がある。こうした模造品もまた、特注品としての文脈で理解すべきものであり、解釈の傍証となろうか。

## 2. ナデ関三角式の来歴と製作地

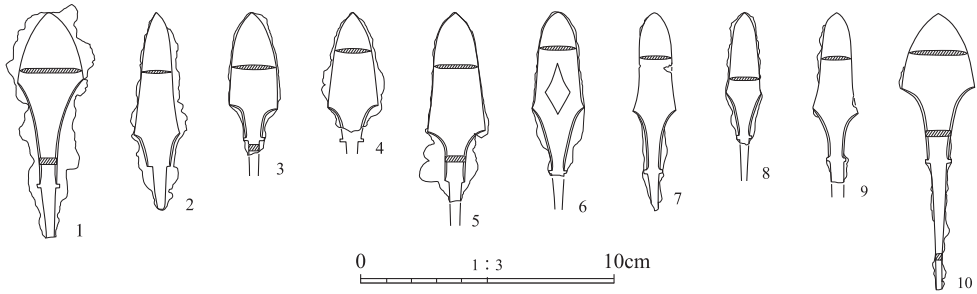
一方、地域生産を認めがたい鉄鏃形式として、ナデ関三角式や方頭式、圭頭式を挙げることができる。ただ、方頭式と圭頭式は奈良時代まで継続する形式であり、とくに方頭式については、前章でのべた Ut1 の形成時期にかかる問題を考慮するならば、古墳時代の所産と積極的に評価することはやや難しい状況にある。両形式については、ここでは搬入品の可能性を指摘するにとどめ、先行研究が豊富なナデ関三角式について詳細な検討をすすめる。

**先行研究と出土例** 本遺跡からは、ナデ関三角式が 4 点出土している（第 7 図 1～4）。東日本における地域色の分析をすすめた水野敏典は、本形式



0 1:3 3cm

第 6 図  
鉄矛模造品



第7図 ナデ関三角式の諸例

1～4：長野 青木下 5：長野 穂高F9号 6～8：埼玉 北大竹 9・10：静岡 中原4号

について、近畿や西日本を中心に分布する形式であり、後期前半には東日本で広い分布をみせ、関東地方では首長墳をはじめ主要な古墳から出土すること、その後千葉県域を除き、出土が確認できなくなることを指摘した（水野 1995：431 頁）。また、東海甲信地域の鉄鏃を網羅的に分析した大谷宏治は、分布が不均一であり、三重県域から静岡県域西部に多い傾向にあることをあきらかにした（大谷 2004：260 頁）。長野県域の出土例は、千曲市森8号墳（後期前半）と松本市妙義山古墳（時期不明）の2点を数えるのみで、これまで古墳時代後期後半の事例は未確認であったが、近年、安曇野市穂高古墳群の発掘調査においてF9号墳より1点（第7図5）の出土が確認された（青木・朝倉編 2019）。ただ、今後の増加を想定しても、その数が僅少である傾向は変化しないとみられる。

**来歴と製作地** 本例については、そもそも長野県域の古墳副葬矢にさえ採用されない鉄鏃形式を祭祀供献品のために特注したとは考えがたい。工人の移動や形態情報が伝播した可能性も排除はできないが、まずは他地域からの搬入品と解釈すべきである。

その候補地については、分布のあり方や出土古墳の階層的な高さから近畿地域からの搬入品と想定する見解が主流である。たしかにナデ関三角式は、奈良県藤ノ木古墳や千葉県城山1号墳、栃木県伯仲1号墳といった「首長墳」と評価される古墳での出土例が知られる（杉山 1988・内山 2023）。同形式の鉄鏃を倭王権からの分有品と考える仮説は、古墳時代後期以降において、王権と地域社会との政治的関係を具体的に主張できる魅力的なモデルといえる。

ただ、あらためて資料の実態を確認すると、ひとくちにナデ関三角式といってもその形態は多様であり、静岡県中原4号墳のように、同一の古墳から複数型式が出土するケースも少なくない。くわえて、同墳からは青木下遺跡出土例との近似形態（第7図10）の出土も確認できるほか、同一寸法の個体が埼玉県北大竹遺跡の土器集積遺構（7）と中原4号墳（9）から出土している。論証は十分ではないが、こうした存在形態を積極的に評価するならば、かつて池上悟が鉄鏃に同工品を設定し、東海地域から関東地域への搬入を主張し（池上 1992）、内山敏行が静岡、北～西関東、千葉地域を初期の地域生産の候補地に挙げたように（内山 2003：28 頁）、静岡県域や関東地域といった近接地域からの搬入品である可能性も射程に入れる必要がある。

第1表 青木下遺跡出土鉄鏃の来歴類型

類 型	来歴の概念	来歴の説明	根拠となる指標
A - 1 群	地域生産品（恒常製作型）	遺跡周辺での恒常的製作品	古墳副葬鉄鏃との形態的共通性
A - 2 群	地域生産品（特注製作型）	遺跡周辺での特注品	粗雑な細部形状
B - 1 群	地域搬入品（隣接地域）	県域内隣接地域の搬入品	県域内の分布のあり方，形態的特徴
B - 2 群	外来搬入品（隣接県域）	隣県域からの搬入品	県域内の出土例の少なさ
C 群	外来搬入品（近畿地域）	倭王権からの授与品	出土例の少なさ，形態的稀少性

いずれにせよ，単一遺跡において希少形態の鉄鏃が複数点出土した意義は大きい。古墳に副葬される鉄鏃型式に選択が働いている可能性を示すものといえ，長野県域北部の地域社会における鉄製武器の流通や授受，供献行為の実相を究明する上での重要資料と評価しうる。

### 3. 生産・流通・授受モデルの構築にかかる予察

第1表は，ここまでの作業にもとづき，生産・流通・授受モデルを将来構築するための予備的整理として，製作地の視点から本遺跡出土の鉄鏃において想定しうる来歴を類型化したものである。地域内での地産地消（地域生産）を想定するA群，隣県域程度の地域間流通を想定するB - 2群，倭王権からの授受を想定するC群など，5群に細別できる。祭祀遺構としての特殊性には留意が必要であるが，地域社会における鉄鏃の一側面を示すものとして，古墳副葬鉄鏃との比較において示唆に富む結果といえるだろう。

取り扱いに苦慮するのが，県域内隣接地域からの搬入を想定するB - 1群である。製作地にかかるこれまでの議論をふりかえると，王権膝下にある近畿地域での製作か在地生産かという二項対立的な構図で論じられる傾向があった。地域のどの範囲までを「地域生産」とし，どこからを「搬入品」と区分するか，その基準については議論が尽くされておらず，郡域程度を「地域」の基本単位としつつ，研究者の領域認識に応じて運用されてきたとみられる。地域生産品と搬入品が混交する馬具や直刀でも事情は共通しており，研究の精緻化によって顕在化しつつある課題といえる。

内山敏行は，全国的に共有される「共有型式」と，地域のみに展開する「地域型式」という概念を提示し，鉄鏃組成からその来歴の整理を成功させている（内山2011：21頁）。ただちに解決の方策を提示することはできないが，内山のような先行事例を参考にしつつ，精度の高いモデルの構築に取り組む必要がある。この点において長野県域は，小地域を把握しやすい地形的環境にあり，授受の経路や単位をさぐる良好なモデル領域である点を付言しておく。

### おわりに

今回の作業で得られた所見と今後の課題を以下に提示し，本稿のまとめとする。

第一に，青木下遺跡出土鉄鏃のうち，型式学的検討が可能な個体のほぼ全点を提示し，現況の研究水準に応じた実測図を作成した。これによって，他の出土例との型式学的な比較検討が

可能になった。

第二に、古墳出土鉄鏃との比較検討をすすめ、平根式の比率が高く、古墳副葬品の形態的規範を外れた鉄鏃やエラボレーションが欠落した粗雑な印象を受ける個体が一定数含まれることを指摘した。そのうえで多くの鉄鏃が地域生産品である可能性を提示した。

第三に、ナデ関三角式について類例を分析し、近接地域からの搬入品である可能性を考慮する必要があることを指摘した。また、製作地の視点から本遺跡出土の鉄鏃に想定される来歴を5群に類型化するとともに、「地域」の範囲設定にかかる課題を提起した。

本稿は、事実関係の整理に紙幅を費やしており、直刀や農工具といった他の出土鉄製品との比較は十分ではない。また、他の祭祀遺跡や堅穴建物跡出土例との比較検討も未実施である。前提をかさねた本稿の不備は数多いが、古墳副葬鉄鏃の分析だけでは評価が難しい地域社会の中での鉄鏃、ひいては矢の扱われ方を考究する起点資料としての価値を示すことができたとするれば、基礎的作業としての本稿の目的は、ひとまず達成されたものとする。

## 謝 辞

本稿は、2023年7月から8月にかけて開催した森將軍塚古墳館千曲市誕生20周年記念夏季企画展『さらしなはにしなの小さな古墳たち』を契機とし、2023年12月30日にオンライン開催された「横断研究会」で発表した内容をもとに起筆したものである。展示リーフレット作成や本稿の執筆にともなう資料調査、研究会等において以下の諸機関、諸氏に多大な助力を賜った。記して感謝申し上げたい。

國學院大学博物館、坂城町教育委員会（文化財センター）、青笹基史、大谷宏治、内山敏行、齊藤大輔、櫻井秀雄、篠井ちひろ、谷畑美帆、塚本敏夫、鳥羽秀継、本間美麻、箕浦絢、宮代栄一、渡辺夏海（敬称略・五十音順）

## 註

- 1) 報告書では「Ut○号土器集積址」と表記しており、略号としてUt (unit (ユニット)) を用いている。本来ならば、報告書の表記に従うべきところであるが、紙幅の関係から、本稿では個別の遺構を言及する際は「Ut + 遺構番号」で遺構名を表記する。
- 2) 保存処理については（公財）元興寺文化財研究所が実施したが、X線透過写真の判読によって鉄製品に有機質を巻き付けた痕跡が認められたことから、錆化した有機質情報の保護のため、錆の除去を最小限に留めた旨を塚本敏夫氏よりご教示いただいた。本例が保存処理後も広く錆に覆われているのはこうした理由による。
- 3) 第3図・第4図は、寸法的な差異の認識を容易にするため、近似する個体の順に配列しており、細別形式ごとにまとまっていない箇所もある。
- 4) 「類五角」といわれる、鏃身外縁の屈折が明瞭でない個体についても五角式として区分している。
- 5) 近年、杉山秀宏は棘関の登場時期が後期前半までさかのぼる事例を提示した（杉山2023）。後期古墳出土鉄鏃の年代比定にかかわる重要な指摘であり、今後、群馬県域特有の事例であるのかを慎重に見きわめていきたいと考えているが、本稿では従来の年代観を採用する。

- 6) 長期間の供献行為の集積である本資料に細かな分析をくわえても、有意な結果を示さないとの批判も想定しうる。しかしながら、分析作業で示したように、ほとんどの鉄鏃は後期後半から飛鳥時代前半の期間の所産であり、追葬をふくめた後期・終末期古墳副葬鏃で一般的にみられる時間幅と大きな差異はないため、古墳副葬鏃との比較検討に十分耐えうるものと考ええる。一回の供献行為に用いられた矢の本数は1、2本かもしれないが、同じ遺跡から多量の鉄鏃が出土している事実を目を向け、背景を検討する作業こそ、今すすめるべき取り組みと考える。
- 7) 2013年時点での出土点数は、平根式が約220点、細根式が約780点を数え、その比率は1:3.5である。その後の出土例は加算していないが、比率自体は大きく変化していないと考えている。

## 参考文献

- 池上 悟 1982「後期古墳時代集落出土鉄鏃に関する若干の問題」『東京考古』1 50-78頁。
- 池上 悟 1992「東国古墳出土の有茎平根鏃について」『武蔵野の考古学—吉田格先生古稀記念論文集』235-252頁。
- 内山敏行 2003「古墳時代終末期の長頸鏃—東日本における棘関長頸腸抉鏃の評価—」『武器生産と流通の諸画期』27-42頁。
- 内山敏行 2011「後期・終末期古墳出土の鉄鏃—東日本の場合—」『考古学ジャーナル』616 19-22頁。
- 内山敏行 2023「永野川流域の古墳時代大刀と馬具—栃木市伯仲1号墳とその周辺地域を考える—」『研究紀要』第31号 公益財団法人とちぎ未来づくり財団 33-48頁。
- 大谷宏治 2004「東と西の狭間—古墳時代後期の鉄鏃にみる東海・甲信地方の特質—」『設立20周年記念論文集』財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 257-276頁。
- 桐原 健 2012「古墳時代の大甕祭祀—坂城・青木下遺跡の紹介—」『博古研究』第44号 24-28頁。
- 櫻井秀雄 2007「古代科野の神まつり」川崎保編『信濃国の考古学』163-186頁。
- 櫻井秀雄 2015「祭場の「固定化」と「清浄性」—長野県青木下遺跡にみる古墳時代祭祀の一考察—」『金沢大学考古学紀要』37 13-19頁。
- 笹生 衛 2010「古墳時代における祭具の再検討—千束台遺跡祭祀遺構の分析と鉄製品の評価を中心に—」『國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要』2 91-102頁。
- 篠原祐一 2006「須恵器大甕祭祀」『季刊考古学』第96号 28-31頁。
- 椋山林継 2008「青木下遺跡から見る日本の祭祀」『青木下遺跡～よみがえる古代の祈り～』坂城町教育委員会 27-43頁。
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鏃について」『檀原考古学研究所論集』第8号 529-644頁。
- 杉山秀宏 2023「群馬県における古墳時代鉄鏃の棘状関の出現について」『研究紀要』41 群馬県埋蔵文化財調査事業団 79-92頁。
- 助川朋広 1997「長野県埴科郡坂城町青木下遺跡Ⅱの祭祀遺構」『祭祀考古』8号 1-3頁。
- 種石 悠 2009「古墳時代の弓矢鏃」『物質文化』87 41-60頁。
- 塚本敏夫 2022「儀仗としての武器・武具—古代・中世における武具祭祀の展開—」『古代武器研究』Vol.17 35-57頁。
- 津野 仁 1990「古代・中世の鉄鏃」『物質文化』54 59-75頁。
- 津野 仁 2007「古代西日本の鉄鏃—地域性と古墳時代との関連」『古墳文化』Ⅱ 99-120頁。
- 平林大樹 2013「信濃における後期・終末期古墳副葬鏃の変遷」『物質文化』93 123-138頁。
- 平林大樹 2014「信濃における後期・終末期古墳副葬鏃の生産と流通」『信濃』第66巻第9号 665-684頁。
- 平林大樹 2017「信濃における後期・終末期古墳副葬矢の製作」『信濃』第69巻第3号 信濃史学会167-183頁。

- 平林大樹 2018「古墳副葬矢鏃の分析視角」『古代武器研究』14 古代武器研究会 103-115 頁。  
平林大樹 2021「根挟みを用いた後期・終末期古墳副葬矢の構造」『文化財と技術』10 126-139 頁。  
水野敏典 1995「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢Ⅳ—滝口宏先生追悼考古学論集—』  
423-441 頁。  
箕浦 絢 2019「古墳時代関東における集落堅穴建物跡出土鉄鏃の分布と組成」『考古学集刊』第15号  
19-38 頁。

#### 発掘調査報告書

- 青木下：助川朋広編 2007『南条遺跡群 青木下遺跡Ⅱ・Ⅲ』坂城町埋蔵文化財調査報告書30 坂城町教育委員会  
金井下新田：小島敦子・原雅信ほか編 2021『群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書684：金井下新田遺跡 古墳時代以降編』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
北大竹：渡邊理伊知・赤熊浩一編 2022『北大竹遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告477 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
中原4号：富士市教育委員会 2016『伝法 中原古墳群』  
穂高F9号：青木敬・朝倉一貴編 2019『穂高古墳群2016・2017年度F9号墳発掘調査報告書』國學院大学文学部考古学研究室実習報告第55集

#### 出典一覧

- 第1図・第1表：筆者作成。  
第2図 左：報告書第4図を再トレース，一部改変。右：報告書第32図を転載，一部改変。  
第3・4・6図：筆者実測・製図。  
第5図：報告書第7図～166図所載の実測図を転載。  
第7図 1～5：筆者実測・製図（5は國學院大学考古学研究室保管）。6～8：渡邊・赤熊編2022第317図を再トレース。9・10：富士市教育委員会2016第98図を再トレース。  
写真1：筆者撮影。

平林大樹（筑波大学大学院）

Reexamination of Iron Arrowheads Excavated from the Aokishita Site,  
Nagano Prefecture

HIRABAYASHI Hiroki

The Aokishita Site is a ritual site located in Sakaki Town, Nagano Prefecture. Excavations have revealed a large amount of Sue ware and earthenware arranged in a ring pattern, and the site has been discussed as one of the most important earthenware accumulation sites in eastern Japan. The author believes that the iron arrowheads at the Aokishita site are an important source of information on the life history of iron weapons and local production, but until today they have been little studied.

Based on the above recognition, 53 items were newly illustrated using radiographs. These iron arrowheads are placed in the I-II phases of the iron arrowhead chronology in the Nagano Prefecture area. The compositions are overwhelmingly of the Hirane type, which is a major difference from iron arrowheads excavated from kofun tumuli. Also included are individuals that deviate from the morphological norm or are crude.

Based on the above, the majority of the pieces were considered to be local products made and offered in the area surrounding the site, while the Nade Machi Sankaku type was interpreted as being brought in from other areas.

The author believes that the above analysis has provided some insight into the production, reception, and offering of weapons in local communities, which is difficult to grasp from an analysis of burial arrowheads in kofun tumuli alone.